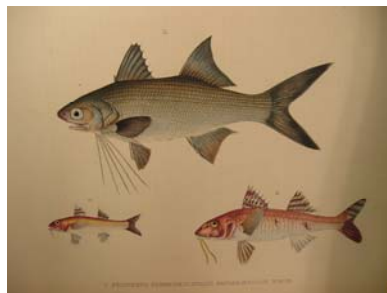


図書館常設展示 第2回

水生動物図譜・目録

－明治・大正期を中心として－



場所：東京海洋大学附属図書館(品川キャンパス)

期間：2008年7月15日(火)～12月22日(月)

主催：東京海洋大学附属図書館

表紙の写真は Fauna Japonica. Pisces より I POLINEMUS PLEBEUS (ツバメコノシロ) II
MULLUS BENSASI (ヒメジ) III MULLUS DUBIUS (ヒメジ) の図。

水生動物図譜・目録展示資料リスト(年代順)

第二次世界大戦前は写真が発達していなかったため、動物の図版は手書きを主とした。普段目に触れることのない論文の図版には博物画としても興味深いものが多い。例えば、動物学雑誌 11 巻に掲載された蝶の彩色図版は同誌の売り上げを倍増させたと言われる。図版を描いた人は論文の著者の場合もあるが、研究室に所属する画工による場合も多かった。今回は水生動物の論文の図版中から主として和本を除く、明治・大正期の代表的図鑑・目録等を展示することとした。

1 Fauna Japonica. Pisces / C. J. Temminck and H. Schlegel—L. Batavorum, 1842-1850.

シーボルトによる「ファウナ・ヤポニカ」の魚類篇。日本の魚類についての最初の欧文文献であり、日本の魚類学の基礎として重要であるとともに世界の魚類学においても貴重な文献である。図は川原慶賀など日本人絵師が描いた下絵をもとに作成されている。京都大学附属図書館ホームページで電子化されて公開されており、貴重な画像をみることができる。

(<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/b05/b05cont.html>) 482.1/Si2/R/別置図書

2 なみまの^{にしき}錦. 1883.

明治 16 (1883) 年に出版された海産魚類 12 種の原色図である。松井魁著「書誌学的水産史並びに魚学史」によれば、原色図では日本最初の印刷であるという。182/043/1/別置図書

3 三重県水産図解：合冊/ 早田秀純[編著]；桜井金次郎[絵図]；東海水産科学協会・海の博物館編。東海水産科学協会・海の博物館，1984.

明治 16 (1883) に我が国最初の水産博覧会に出品するために三重県が製作した本の複製版。詳細な描写により当時の漁労法がよくわかることでも知られる。

660. 2/To28

4 ^{するめずかいちらん} 鰯圖解一覽 / 河原田盛美著；田中芳男関；中島仰山圖。大日本水産會，1884.

烏賊柔魚 17 種、スルメイカ製鰯 27 品、ヤワイカ製鰯 15 品、アブリイカ製鰯 16 品、合計 17 種 74 品の図の下に鰯の釈名、産地、漁法、製法等の解説と柔軟動物頭脚族区別表を掲げた。131/K12/1/別置図書

5 内村鑑三(1884、未発表)日本魚類目録.

本書の原本は北海道大学附属図書館に所蔵されている。内村の自筆稿本を翻刻した資料。シーボルトの Fauna Japonica. Pisces は日本産魚類 359 種を分類

記載しているが、内村は 620 余種を記載している。22 篇の日本産魚類に関する外国文献を駆使し、当時の世界の学会に通用する亜・綱・目・科に分類して学名に対する和名を当て、実物を確認同定した魚名を加えた、日本人の自力になる最初の本格的な日本産魚類目録である。

* 展示資料は北海道大学水産学部研究彙報 18(3)p. 136 に掲載の写真。P660/8

6 日本有用水産分類表 . -- 大日本水産會, 1889.

本資料は明治 19 年農商務省水産局においてその編纂を企画した日本水産誌(日本水産捕採誌、日本有用水産誌、日本水産製品誌)の一にして、唯一未刊となった日本有用水産誌の基礎資料である。なお、編纂委員は加藤正誼、柏原忠吉である。004/H11/N2/羽原文庫

7 日本重要水産動物圖 / 大日本水産會編. 第 1 圖 - 第 7 圖. -- 訂正増補. -- 小林新兵衛, 1897.

1889(明治 22)年、仏国大博覧会に農商務省水産局は本邦重要水産動植物 159 種を撰び、石版印刷で出品した。1897(明治 30)年、大日本水産会はこれを改訂増補して 400 種以上として刊行した。亀井鑑太郎が石版画で描いている。

662. 6/D25/別置図書

8 大瀧圭之助(1897)本邦産ひらめ族の査定 水産調査報告 6(1)17-36 図 5-8.

P660/188

9 松原新之助(1889)さばニ就テ 動物学雑誌 1 193-197 図 20. P480/1

10 岸上鎌吉(1892)アカクラゲ 動物学雑誌 4 261-265 図 2-3. P480/1

11 岸上鎌吉(1922)エチゼンクラゲ 動物学雑誌 34 343-346.

昨今話題のエチゼンクラゲについて初めて命名し学術的に紹介した論文。P480/1

12 穴戸一郎(1899)日本産龜黿類 動物学雑誌 11 257-278 図 15-16 P480/1

13 岸上鎌吉(1900)本邦産くるまえば属 水産調査報告 8(1) 図 1-9 P660/188

後述岸上鎌吉の項参照。

14 岸上鎌吉(1902)たひ漁業調査 水産調査報告 10(3) 図 2-7. P660/188

15 岸上鎌吉(1904)さんごノ研究 水産調査報告 14(1) 図 1-9. P660/188

16 田中茂穂 (1905)ギンザメ類 動物学雑誌 17 P480/1

17 神谷尚志 (1916)館山湾ニ於ケル浮性魚卵並ニ其稚児 水産講習所試験報告 11(5) 後述神谷尚志の項参照。P/1

18 Terao, Arata (1922) A new decapod crustacean, *Sympasiphaea imperialis*, n. sp. Annot. Zool. Japon. 10(10)

昭和天皇が発見された動植物はかなりの数にのぼるが、その第一号は、1918(大正 7)年に沼津御用邸近くの海岸で発見された大きな赤いエビが最初である。1922 年、水産講習所の寺尾新教授の研究により、「しょうじょうえび, *Sympasiphaea imperialis*」と命名され、新種とされてきた。これはその論文

である。また、彩色の図は、寺尾新(1922) 摂政宮殿下御採集の猩々蝦 科学知識 2(4)からのコピー。なお、1982 年、武田正倫と正仁親王(常陸宮)の共同研究により、*Sympasiphaea annectens* と同種と判明、先の学名はシノニム(異名) となり取り消された。 005/Ku11/72/久保文庫

19 グラバー図譜 / 倉場富三郎著 ; 長崎大学水産学部 ; 第1巻-第5巻 索引
長崎大学水産学部, 1973

貿易商グラバーの子息、倉場富三郎が明治末より昭和初期までに編集して作成した当時の長崎の魚類図鑑の複製版。

画家が描いた詳細な魚の図が 800 点あまり収録されている。博物学としては勿論美術的価値も高いものである。倉場富三郎が死後に原本を寄贈した渋沢敬三は、寄贈先として長崎大学のほかに水産講習所も考えていたらしい。しかし、グラバー親子が愛した長崎市に置かれるべきとのことで、長崎大学水産学部に贈られ、現在は長崎大学中央図書館に保管されホームページで公開もされている。<http://oldphoto.lb.nagasaki-u.ac.jp/GloverAtlas/index.php> 487.5-N21

20 Sasaki, Madoka (1929) A monograph of the Dibranchiate Cephalopods of the Japanese and adjacent waters. Journal of the Faculty of Agriculture, Hokkaido Imperial University. 20(supplementary Number)

後述の佐々木望の項参照。 P610-1

21 日本水産動植物図集 / 大日本水産会編纂. 上編, 下編. -- 大日本水産会, 1931

大日本水産会創立五十周年記念として刊行された。過去に刊行された「日本重要水産動物図 訂正増補版」は約 400 種以上であったが、本資料は 600 余種を記載している。また、原図は当時の魚介写生の大家伊藤熊太郎が描いた。監修は、石川千代松、岡村金太郎、田中茂穂、丸川久俊、寺尾新、日暮忠、妹尾秀實が担当した。 662.6-D26-R

22 Kishinouye, K. (1923) Contributions to the comparative study of the socalled Scombroid fishes. Journal of the College of Agriculture, Imperial University of Tokyo 8(3) P610-42

23 Jordan, D. S., S. Tanaka & J. O. Snyder (1913) A catalogue of the fishes of Japan J. Coll. Sci., Tokyo Imp. Univ. 33(1)

後述の田中茂穂の項参照。 P400-158

24 大日本魚類畫集 / 大野麥風著 西宮 : 西宮書院, 1937.8-1940.9

荒俣宏によれば、近代日本最高の魚類図鑑であるとのこと。木版手摺図版全 72 図版といわれているが、正確には不明。500 部刊行された。田中茂穂・上田尚の解説あり。昭和期錦絵の傑作として美術的にも価値あり。今回は所蔵品の中から「カレイ」「コイ」「メバル」「ビワヒガイ」「マハゼ」を展示する。

水生動物図譜をめぐる人々

内村鑑三（うちむら、かんぞう）

群馬県出身、キリスト教指導者として有名だが、水産研究者の側面も持つ。北海道で開拓使吏員として漁業調査に従事し、上京して農務省で魚類研究に携り、東京海洋大学の前身の水産伝習所でも教鞭をとり水産動物学を教えた。展示資料の「日本魚類目録」のほかにも多数の水産関係の論文を著している。

岸上鎌吉（きしのうえ、かまきち）

東京帝国大学動物学教室では箕作教授のもとでクノモヤカブトガニの発生を調べるとともにクラゲ類を研究した。現在、話題となっているエチゼンクラゲも岸上の命名である。1888年大学卒業後は水産伝習所講師、農商務省技師となり、水産学の育成に努めた。水産方面では、アワビ、イワシ、タイ、サンゴなどの研究があるが、特に有名なのがエビ類についての業績である。1929年、中国成都で客死した。木村重によれば、岸上博士は画は四条流を学ばれ、論文の挿絵も自筆が多い。水彩画の余技、特にエビとカツオは堂に入ったもので、釣雑誌の表紙画も揮毫されたことがあるとのことである。

田中茂穂（たなか、しげほ）

高知県出身、1903年魚類分類学の研究を開始した。1940年東京帝国大学を定年退官。

日本の魚類分類学の創始者であり、約170種の新種を発表した。

D. S. Jordan・田中茂穂・J. O. Snyderにより、当時日本で知られている魚類全種1244種を詳細に記載した目録が発表された。原稿はほとんど田中博士が執筆されたものである。（自筆原稿は東京大学総合研究博物館で所蔵）。これにより、日本の魚類学の基礎が築かれた

神谷尚志（かみや、たかゆき）

水産講習所高島実験場に主任として約7年間在勤した。浮性魚卵及び其の稚仔の研究に力を注いだ。水産講習所の紀要には館山湾関係3編、瀬戸内海1編、北陸1編の発表がある。

寺尾新（てらお、あらた）

東京出身、水産講習所で動物発生学・組織学を教え、水産研究と教育を行った。久保伊津男と松原喜代松は門下生である。日本水産学会の創立発起人。戦後は宮崎大学教授として水産研究に貢献した。

佐々木望（ささき、まどか）

1883年広島県出身、1909年7月東京帝国大学理科大学動物学科卒業、1909年8月東北帝国大学農科大学水産学科（後の北海道帝国大学水産専門部）講師、1927年ハンガリー、ブタペストに於いて病気のため客死（満44歳）。日本に於ける頭足類研究の先駆者。

日本及び近海に産する頭足類の分類を研究し、その死後1929年刊行された大冊は Journal of the Faculty of Agriculture, Hokkaido Imperial University. Vol. 20, supplementary Number (本文 357 p., 図版 30 pl.) で頭足類の分類学の基礎は完成した。